

平成 29 年度校内研究について

平成 29 年 5 月 研究推進委員会

(1) 研究主題

『主題に向き合い、共に読みを深める児童の育成』

～対話的な学びを工夫した文学的文章の授業づくり～

※ わかくさ学級については文学的文章に限らず、国語科の授業研究を行っていく。

(2) 研究主題設定の理由

学校経営方針及びこれまでの研究から

本校では、学校経営方針の中に「子どもの良さや可能性を引き出し、伸張させる教育」を位置付けている。その実現のためには、お互いを認め合う言語環境を整えていくことが大切である。

校内研究としては、昨年度までの3年間、『言葉と向き合い、論理的に考える児童の育成』を研究主題に掲げ、レディネスを工夫し、第二課題を設定した国語科の説明的文章の指導法の研究を進めてきた。特に、平成28年度は、単元構成の工夫や読書活動の推進、交流の工夫など児童の実態に合わせた手だてを考え、指導法の幅をさらに広げることができた。

一方、平成29年3月に告示された新学習指導要領では、国語科を含む各教科等の目標及び内容が育てたい資質・能力の3つの柱で整理され、それらの資質・能力を育むために「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善が求められたところである。

昨年度末に児童の実態を教員間で共有したところ、自分の考えを明確にもつことや、伝え合うことで考えを深めたり、高めたりすることに課題があることが分かった。また、全国学力・学習状況調査結果においても、国語科では、目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながらかく読むことに課題がみられた。

以上のことから、これまで本校で積み上げてきた国語科の中でも、年間に複数の単元が位置付けられている文学的文章を教材とした指導において、対話的な学びを通して、主題に迫る深い学びを実現する授業を研究していく。

(3) 目指す児童像

- ①文章の内容を根拠に、自分の考えを明確にしながら読む児童
- ②自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いて理解しようとしたりする児童
- ③自分の考えと友達の考えを比較して、よりよい考えを生み出すことのできる児童
- ④学習したことを基に、すすんで本を読んだり、考えを深めたりすることができる児童

(4) 研究内容

1) 研究領域

国語科（新学習指導要領における〔思考力・判断力・表現力等〕『読むこと』の領域、特に文学的文章を取り上げる。）

※ ただし、わかくさ学級においては、国語科の授業づくりに取り組むこととする。研究の視点については②・④を参考に分科会で設定する。）

2) 研究の視点

A：授業づくりの視点

①単元における焦点化

単元の中において、育成すべき思考力・判断力・表現力等を明確にし、児童の思考力・判断力・表現力等を育成する場面で適切に対話的な学びを取り入れ、児童の育成状況を把握する必要がある。そのため、単元全体を見通して焦点化を図り（例えば主題に迫る場面でのみ取り入れる等）、対話的な学びの位置付けを明確にする必要があると考える。

②自分の考えをもつ工夫

児童が文学的文章を読み、読みを深めるためには、言語に関する知識・技能に関する内容をしっかり押さえた上で、課題を明確にする必要があると考える。また、児童が一人で課題に向かう時間を児童の実態に応じて確保し、机間指導により児童一人一人の状況を把握し、適切な個別指導を行うことが重要であると考えます。

③対話的な学び等の工夫

ペアやグループといった交流人数や編成、交流の視点、交流の方法、役割分担等対話的な学びを構成する環境と内容が、単なる伝え合いで終わるのでなく、文学的文章が内包する主題に迫る思考の深まりにつながるように設定することが重要である。

また、交流後、交流結果を学級全体で共有する方法も効果的に設定しないと授業時間を圧迫することにつながるため工夫したい。

④読書活動・図書館活用につなげる工夫

司書と連携し、単元に関連する図書を読み広げるなど、読書活動や図書館活用につなげるような取り組みをしていく。

※他にあれば増やしていく方向です。

B：言語環境の整備

<日常活動>

児童が日常的に言葉に触れ、言葉に興味をもつ環境作りも大切だと考える。そこで、校内に言葉のコーナーを設け発達段階に応じて計画的に掲示していく。季節の言葉や伝統的な言語文化、言葉遊びなど多様な言葉に触れさせる機会としたい。また、始業、終業の挨拶を発達段階に合わせて工夫する。

百人一首の取り組みや各クラスでの言葉を豊かにするための活動を紹介し全校に広げていく。また、読書旬間などの読書活動についての取り組みも昨年度に引き続き充実させていく。

<読書活動の推進>

児童が言葉を豊かにしていくためには、読書活動の推進も欠かせないと考える。今年度も、すすんで本を手取る児童を育てるために、図書館運営委員会を中心とした計画的な読書活動の推進を行っていく。

・読書旬間の設定

6月と10月に読書旬間を設定し、図書委員を中心に読書に親しむことができるように工夫して取り組んでいく。

・学年に合わせた目標の設定

低学年は年間100冊、高学年は年間5000～10000ページを目標にし、カードに記録をさせる。

・読み聞かせ

教員や保護者、図書ボランティアによる読み聞かせを行い、本に親しむ機会とする。

・司書と連携した図書館活用の取組

ブックトーク、百科事典の使い方、テーマに沿った図書の紹介など学習内容に合わせて図書館を活用する。

(5) 研究の方法

- 1) 指導者が教材の主題を明確にとらえ、単元の構成や対話的な学びを工夫した授業を日々の指導の中で実践し、個々の研究を深めていく。
- 2) 年7回の授業研究会を開き、分科会の提案内容について全体で検証する。
- 3) 2月末までに各分科会で研究の成果と課題をまとめ、3月に全体で共有する。
- 4) 先進校の授業研究会に参加し、資料提供・報告を行う。

(6) 研究構想図

互いを認め合う言葉があふれる学校

<児童の実態>

- ・自分の考えを明確にもつことや、伝え合うことで考えを深めたり、高めたりすることに課題がある。
- ・全国学力・学習状況調査結果においても、国語科では、目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながらか読むことに課題がみられた。

<教師の願い>

- ・話を聞いて自分の考えをもって応えることができるようになって欲しい。
- ・児童同士で解決できるようになって欲しい。
- ・学級全体で深めることができるようになって欲しい。

<新学習指導要領の告示から>

- ・各教科等の目標及び内容が、育成すべき資質・能力の三つの柱で整理された。
- ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められた。

<平成28年度までの研究の課題>

- ・本校では長年国語科の研究を蓄積してきた。
- ・昨年度までの3年間は、説明的文章を題材とした単元構成を工夫した授業づくりを研究してきた。

<目指す児童像>

- ①文章の内容を根拠に、自分の考えを明確にしながらか読む児童
- ②自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いて理解しようとしたりする児童
- ③自分の考えと友達の考えを比較して、よりよい考えを生み出すことのできる児童
- ④学習したことを基に、すすんで本を読んだり、考えを深めたりすることができる児童

『主題に向き合い、共に読みを深める児童の育成』

～対話的な学びを工夫した文学的文章の授業づくり～

<研究の仮説>

単元全体を見通して対話的な学びを工夫すれば、主題に迫る深い読みが実現し、児童の伝え合う力を高め、思考力が育つだろう。

A：授業づくりの視点

- ①単元における焦点化
- ②自分の考えをもつ工夫
- ③対話的な学び等の工夫
- ④読書活動・図書館活用につなげる工夫

③についてを、今年度の研究の柱として、協議を進めていく。

B：言語環境の整備

- ・『言葉のコーナー』の設置
- ・始業、終業の挨拶の工夫
- ・日常的な言葉を豊かにする活動の充実
(百人一首、朝の詩など)
- ・読書活動推進のための工夫
(読書旬間の設定、読書の木など)

(7) 研究組織

